
頤（おとがい）

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おとが
い 頤

【Nコード】
N4240G

【作者名】
光差す海

【あらすじ】
父は、母が病死した時、私達兄弟が変わりに死ねばよかったのに、と言った。父を信じられず、母を幼くして失った私の、魂の告白の物語。

この拙い物語を、まだ見ぬ未来に戸惑う全ての諸兄に贈る

何事につけても、希望するのは絶望するよりもよい、可能なものの限界をはかることは誰にもできないのだから　ゲーテ「タツソー」より

1、形見の人形

私の母は私が四歳の時に死んだ。肺結核にかかり、長く入院して苦しんでいたのを覚えている。父方の祖父母は比較的近い場所に家を構えていたため、二歳上の兄と二人、祖母に幼稚園に迎えに来てもらったりしたのをよく覚えている。母の病前の写真が残っているが、どこか生気がなく、着ている衣装が全てぼやけているように見えたのは、そのまま私の母の記憶が薄いからだというわけでもあるまい。声を憶えていないのは何故だろうか。母が亡くなって後、父は我々兄弟に、泣き腫らした目で、お前達のどちらかが代わりに死ねば良かったのに、と言った。その言葉は私の脳裏に焼きついて離れなくなった。きっと、その時に父親の中で、我々も死んだのだろう。やがて再婚するのだが、我々はお荷物どころでなく真空のような存在に成り果てた。母の死に泣いて嗚咽している最中、顎が痛くなった。大きな口を開けたのだろうか、このとき以来、ずっと私の顎には痛みが残るようになった。

母の荷物を整理した際、なぜか分からないが処分され損ねたらし

く、一体のフランス人形が押入れに残っていた。そもそも、それが母の持ち物だったのかどうかわからない。兄にも私にも人形は不要であったし、幾ら少女趣味でも二児の母の所有物としては不釣合いだ。だが、私はそれを母の忘れ形見として、今なお持っている。私にも、産んでくれた母がいた——その事を確信する何かが無いと、遂に私は突如この世界に降って湧いてきた親のない私生児、になっってしまったからだ。

母が死んだ後、祖父が経営者である大手の紡織会社に勤めていた父は、分かり易く一切の家庭を顧みない男になった。家にも帰らず何処かに泊まってくる事が多くなり、私は必然的に兄と二人きりで家にいた。父方の祖母のみが我々の世話を無私の愛情でしてくれたが、我々は、実の母を失ったショックも高じ、祖母にわざと冷たく振舞ったりした。それでも祖母は家事を淡々と行い、また、祖父の紡績会社は時の高度経済成長の中で素晴らしい業績を挙げたので、金銭には一切不自由しなかった。親の愛を知らず、金だけは持っている子ども。私はそんな子どもだった。いつも家にいて本ばかり読むようになった。兄はもう少し違った。恵まれた体格を持っていたので、むしろ町のお山の大将のように振る舞い、よく喧嘩沙汰を起こしていた。だが、弟である私には大変優しくかった。後年、お前は唯一の運命共同体員だったから、と言っていた。

お盆、クリスマス、お正月と言った、本来家族で楽しむ行事について何一つ幸せな記憶がない。思い浮かぶのは、いつも何かしら豪華な贈り物を持ってくるが、長居はせず去っていく祖父母の姿だけが当然楽しかったに違いない。父だって三箇所ぐらいは家にいてもよさそうなものだが、形ばかりのお年玉など渡して、賭博などに出かけていた。薄暗い押入れの中の古びたアルバムを開いても、数枚しか写真が無い。そのような寂しい想い出しが少年時代に持てなか

った、という人は一人私だけでも無いだろう。けれども、お前が代わりに死ねばよかったのに、と言われた人はそうはいまい。おかげで、私には未だに父親というものが深刻な響きを持って「敵」としか思えない。

2、父の再婚

やがて、兄が小二、私が幼稚園年長になる頃、父は再婚した。背の高い、見栄えのする、そして、人からどう見られるか、が価値観の全ての女性だった。いつも人とは違う衣服を纏い、そして、私たちの手を引いて歩いた。私も兄も大またの闊歩に引きずられるように着いて行つた。ある時、歩くのが早いよ、と言うと、あなたが遅いのです、と断言された。自分のことをお母さんと呼びなさい、としつこく言うので、こちらは意地になって、妙子さん、と本名で呼んだ。横っ面を張られ、その後わざとらしくさめざめ泣いて抱きしめてくるのだった。父は、そのような妙子さんの苦労自体にも興味は無く、私を見る時は野良犬を見るように蔑んで見た。少なくとも私にはそうとは思えなかった。この当時、父親のこのような態度には、自分にも悪いところがあるのだろう、と自然に思っていた。そして、何事かを改善すれば、また父も私や兄を可愛がつてくれるのではないか、と考えた。しかし、何をどうすればいいのかわからなかったし、今もってわからない。父は私の通知簿すら見ないのだった。

父は、いつしか深酒をするようになっていた。酔うと大声を出して妙子さんに当たった。優依を返せ、と喚いた。優依とは結核で死んだ母の名前である。そして妙子さんが何か言つと、殴打していた。兄は義侠心が強く、何度も間に入っていたが、体が大きくなるまでは彼我敵せずであった。私は自室に籠って何も聞こえない振りをし

て、伝記や偉人伝の世界に逃げていた。幸い、大企業のオーナーの祖父が息子に買い与えた家は広く、兄にも私にも個室があった。私は、洞穴の深奥部に潜む蝙蝠のように自分を感じていた。

私は孤独であつた。小学校に上がつても、全く誰とも会話をしなかつた。何も誰とも話したくなかつた。担任の先生は、自閉症か何かと心配し、家庭訪問の時にそういう話を父にしたらしい。父が私のために時間を作って担任と会つていたと言う事実だけでも驚愕するが、もちろんそんな風に医者に見せるつもりも毛頭無く、ご心配なくと言つて追い返したらしい。私はいつも青白い顔で教室の隅で一人で座つていた。やんちゃな連中に目を付けられ、黒板消しを放られたりした。すると、何処からかその噂を聞きつけた兄が、バツトを振り回して報復してくれた。私にとつて幸せだったのは、こういう兄がいたことだろう。そうでなければ、いじめにあつて自殺していたかもしれない。私の少ない語彙で言うと、地獄に仏、であつたというべきか。

らず

3、空想のみな

私は脇目も振らず本を読む少年になった。学校や、近所の市立図書館などにいつもいた。家にはいたくなかつたし、兄はいつも公園で友達と野球やサッカーをしていた。兄は、私にも声をかけてくるのだが、私がいつも断つていた。道を歩いていて、いつも特定の人物層を目が追いかけていた。母と同年代の女性なのであつた。その女性が、小さな子の手を引いていたら、溜まらなく羨ましかつた。時々蒲団の中で泣いていた。ある夜中、突如、私の中に、衝動的に途轍もない憎しみが沸き起こり、父親の使っている食器という食器を台所で全て叩き壊そうとした。が、途中で父も妙子さんも慌てて

起き出して来た。父は、常に私に対して「無関心」であつて、敵意や憎悪をぶつけて来る事は無かつた。それらはいつも妙子さんに向かつていた。が、この時、生まれて初めて、私は父の怒りを全身に受ける事になった。何回も拳骨で頬を殴られ、顔が三倍ほどに膨れ上がり、鼻血は噴出し、腹を何度も蹴られ、あばら骨を三本折られた。収まらない父の大声と発作に、妙子さんが思わず110番して警察を呼んだ。兄が、私の上に覆いかぶさり、お父さんこれ以上殴つたら死んでしまうよ、と号泣しながら止めてくれた。この兄の庇いが無ければ、ひよつとしたら私は殺されていたかも知れない。父は一度怒りが自分を征服してしまうと、鬼にも阿修羅にも成り代わる人間だつた。後年、家系なるものを調べてみて、自分の血のおぞましさにぞつとしたものだ。この時以来、私は噛み合わせが悪くなったのか、咀嚼するだけで顎あごに鈍い痛みを感じるようになった。それは現在まで続いている。幼少期の号泣以来、折々に鈍痛をもつてして顎あごがきしむようになった。

学校の成績も全てにおいて芳しくない私の唯一の得意分野は空想であつた。自分がはきはきとした学級委員長だつたら、とか、筋肉隆々としたプロレスラーだつたら、とか、駆け足がとても早く、運動会で一等賞を獲つたら、とか、つまり賞賛を受ける空想が一つ、もう一つは、いつもいつも母が死ななかつたら、と言うものだつた。父も狂わずに、幸せな毎日が続いたのに、と夢想せずにはいられなかつた。そう思うたびに泣いていたし、憂鬱と倦怠を感じていた。小学校5年生になってから、全く学校に行かなくなつた。一日中家でテレビを見ていた。テレビを見ていれば何も考えないで済んだからだ。妙子さんは専業主婦だつたが、最低限食事を持つてくる程度だつた。兄にはまだしもだが、私には殆ど希望を持つていなかった。それは仲良くなれるかも、と言う希望だ。テレビに飽きたら、図書館で借りてきた本を読んだ。貸し借りのため、週に一度は市立図書館に行き、無料で見れるビデオなども見ていた。たまに同級生らし

き子を見かけたが、何も思わなかった。ずっとそうやって生きていた。何かの童話で、不死鳥が出てきた。人は皆不死を求め、その生き血を求めると。全くその気持ちが理解出来なかった。こんな人生なるものが永遠に続くなんて、性質の悪い冗談でしかなかった。

中学に行くべき年齢になったが、全く行く気がしない。父は最近、この家自体に寄り付かない有様で、何処かに別の割り無い女性がいたのだろう。妙子さんは懸念して、祖父母に相談し、祖母が泣きながら懇々と学校に行っておかないと困るのは哲哉、あなたよ、と言われ、しぶしぶ通うことにした。が、通う公立の中学校には立派な図書館と、温和な先生が揃っていた。私は思う存分本を読み、数学の時間に漱石の名著を嗜^{たしな}んでいた。いつしか、そこまで徹底して本を読んでいたからか、「ドクシヨクン」と言う渾名をつけられていたが、それでもどうでもよかった。後年、さすがに友人がいらないと言う寂しさを知ったが、この頃は全く寂しくなかった。学校で一日中、一言も口をきかない、などは普通だった。周りにいる同級生を、私は十羽一からげに「幸福の側にいる人々」と勝手に決めていた。これは後年余りにも大きな過ちで、尊大な思い上がりだと知ったが、当時はそのように捉え、自分はそうでない側の人間だ、一生そうなんだ、と断定していた。つまり、幸福を実現しよう、という欲望が全く無かったのだ。

4、死の引力

中学生の終わりぐらいになると、感受性や自主性が増して来たらしく、また、海外、日本問わず、文学に手を出すようになり、多くの作家が自殺している事を知るようになった。太宰や芥川の自殺に魅せられ、いつしか自分も自殺しようか、とぼんやりと考えるようになっていった。だが、本当に本気で死ぬ勇気などついぞ持ち合わ

せていないのは今でも変わらないし、またそんな自分を情けなく思い、自己否定が始まるのだが。この頃は、特に、自分が生きているのは、誰かに生かされている、と言うような感じは一切しなかった。そもそも何故私は生まれてきたのだ、と憤懣やる方なかった。父親に全否定され、愛する母は他界し、誰とも分かりあえない。この頃になつてくると、ある種の孤独、つまり、価値観を共有し合える仲間のない寂しさに付き纏われるようになった。みんな俺とは違う、俺だけが一人絶望と苦悩を背負っている、と。今になってみれば、なるほどこの私にはそういう資格は確かにあるかもしれないが、やはり独りよがりの感を免れない、とも感じるが、この頃は切実にそう思っていた。同じ境遇でありながら、兄はもつと快活に過ごして今も進学校へと進路を決めて前向きに生きている。違いは何なんだろうか、と初めて考えてみるようになった。

結果は、持つて生まれた天性、素質の違いだと思つようになった。兄と私は結局違う人間なのだ、と。私だけが根暗で引つ込み思案でマイナス思考だ、という結論が出た時、ますます憂鬱になった。憂鬱を抱えながら読む漱石の「こころ」や太宰の「人間失格」やゲーテの「若きウェルテルの悩み」は殆ど決定的に私の青春の方向性を決めてしまった。やはりとにかく死なねばならない。綺麗さっぱりこの世界から去ろう。中学三年生の冬休みに、そう思い立った私はどうやって死ぬかを考えた。なるべく苦しまずに死にたい。いいのは薬を飲んで即座に死ぬ事だが、調べてみると、そのような猛毒、青酸カリなどは普通の人にはまず手に入らないらしい。ならば睡眠薬を飲むか。こんな少年に薬局が売ってくれそうもない。飛び降り？首吊り？溺れ死ぬ？どれも痛そうだし辛そうだ、と思つた私は、樹海へ迷い込む事を選択した。餓死、は辛いかどうか、飢えた経験もろくにない、お坊ちゃんであった私は、軽々にそうしようと判断し、冬の列車に乗って、富士の樹海で死ぬと決定した。頭がきしんでいた。おとがい

結果は、捜索隊にあつまり見つかった家に送り届けられた。気を利かし、泣きじゃくる私に、自殺に向かっていたとは言わないよ、とお巡りさんは言ってくれた。父に真相がバレればまた激しい暴行に遭うだろう、それを私は恐れていたのだった。

自殺こそ果たせなかったものの、当時の私はやはり生への希望を見出す事が出来なかった。何のために生きるのか、何がしたいのか、その全ては未回答だった。敢えて言うなら母のぬくもりを感じて安らかに眠りにつきたい。それは生への永訣ではなく、真の安らぎを味わって、深い眠りから覚め、大いなる新たな一步を踏み出したい、と言うことだった。今思うと私があればだけ自殺の衝動に駆られながら、しかも周りに誰一人として止める存在も無かったのに、結局は死なずに生きていた、と言うこと、これ自体が何かの答えのような気がする。

5、性の果実

同時期程度に、私にも自慰の習慣が出来た。こんな衝動と快楽があるものか、と思った。私は、同級生よりも多くの金額の小遣いだけは貰っていたので、その類の本を買いに行くようになった。そして、自らに女性の嗜好があることも認識した。それ自体が後ろ暗く、背德的であった。誰かの私小説で、手淫ばかりに励む自らに落胆し、何故俺は現実の女性に目を向けないのか、と言うものを読んだ私は、童貞の分際で、この作者を見下す、と言う有様だった。その癖、学校では女生徒と会話すらしたこともないのであった。童貞である以上、性行為がわからないので、全ては想像の産物であったが、豊富な読書量により耳年増であったので、赤線と言うものに行ってみた

い、などと言う途方もない妄想が膨らんだりもした。

ある夜、妙子さんの下着が庭の物干し竿に取り残されているのが目に付いた。瞬間、そう言えばあの人は血のつながりなど無い、と言う事実が気がついた。恥ずかしさと欲望と羞恥が同時に俄かに湧き起こり、体中が熱くなるのが分かった。自分は、人倫の道を踏み外す妄想をしたのだ、と思うとやるせなかった。ただいつまでも脳裏に妙子さんのレースの下着がひらひらと舞っているのだった。

とある休日、一日中電車に乗っていた。何が目的だったかと言うと、若い女性のそばにいたかった。もちろん勇気も度胸も無いので実際に痴漢行為に及んだりする事は無かった。無性に、誰でもいいから女性の存在を身近に感じたかったのだ。席が空いていれば隣に座り、鼻腔に神経を集中した。肩と肩が触れ合うのが心地よかった。夕方になれば乗客が増えた。わざと女性の至近距離に立った。そうして、少しだけ満足して帰った。今考えても不気味な事をしていたものだが、今考えると、若さのうずきもあったのだろうが、それよりなお、私は「母」に飢えていたのだろう。寂しくて仕方なかった。無条件で受け入れてくれる存在が欲しかったのだろう。そして、自分の内なる衝動をぶつけられる相手も欲しかった。

この頃から、私には一つの大きな目標、と言うか欲望が出来上がった。それは、つまりは女性と実際に性行為、セックスをしたい、と言うことだった。それまで、僧侶のごとく無欲に生き延びてきた自分にとっては、それは大いなる驚きであった。が、後年考えてみれば、それも父親の家系の血だったのだろう。酒に飲まれ、女に狂うのが螺旋状のDNAに深く刻まれてしまっているのだった。だが、残念な事に、相手がいない。よもや中学生が風俗店に行っても追いかたれるのが落ちた。私は途方にくれ、有り余る性欲を昇華出来ずにいたのだった。こうして、私は中学生を終えるのであった。

6、変貌

高校生活が始まった。中の上程度の公立高校に入学した。全てが平均的で無個性な高校であった。私はそこで、部活動に入る事もなく、一心不乱に「もてる男」に変身しようとした。自らの風貌にこだわり、ファッション雑誌を買い、無意味に持っていた小金を使い、私服などを購入するようになった。が、いかんせん付け焼刃で、しかも中身は皆無に近い、一人の読書小僧である。まずもって、同級生に話しかける事ができない。それ以前に友達自体がない。困った私は、夜な夜な繁華街の盛り場に顔を出すようになった。ただひたすらうろついた。すると、たまたま小学校時代の同級生ら三人に出会った。何してるの、と聞かれ、何もしてない、と答えると、なら一緒にゲーセンでも行け、と言われ、なんとなくついていった。三人とも髪の毛を染め、派手な身なりをしていた。大きな指輪はめ、黄色や赤いジャケットやスタジャンを着込み、いわゆる当時の言葉で言えば不良であった。お前いい服着てるな、そんな奴だったか、と、リーダー格の藤井は言った。タバコをくわえ、小銭を出してはゲーム機に投じる。私も所在無く格闘ゲームなどをした。そこへ、三人の女の子がやってきて、藤井らに声をかける。顔見知りらしいが、随分と露出の多い服装をしていた事を今でも覚えている。後から聞くと、飲み屋や風俗で働いている子らだったのだが、当時の私にとっては脅威の異形の集団であった。藤井が、今から飲みに行くからお前も来い、とだけ行って一行はどんどん歩いていくので後ろからついていく。一人の女の子、髪を茶色に染め、白のミニスカートをはいた、嫌に姿勢のいい子がこちらを振り向いた。しばらく目が合ったが、恥ずかしくなってこちらから目を逸らした。

雑居ビルの二階にある、入り口の扉からしてけばけばしいネオン

のバーに入っていく。来た試しも無い場所に、こちらはもう緊張しきってただ小さくなって座っていた。藤井が、小学校のツレだ、と全員に紹介してくれた。不思議と、全員嫌な顔をしない。今思うと、私と彼らはある意味で同種だった。親であれ、教師にであれ、愛されていない、と言う意味で。私は飲んだ事もないビールを何倍も飲まされ、酩酊に近くなった。勝手に口が回った。記憶の欠片もないが、美加、白のミニスカートの女は後で、すごく面白い人に急に変貌した、と言っていた。気がつくやう藤井の家の廊下で寝ていた。平日なのに、学校を休んでしまった。藤井自体は仕事に行っていないかった。置手紙に、隠し鍵の場所と、また遊ぶぞ、とだけ書いてあった。

私は藤井らとよくいるようになった。高校には一人も友達がいなかったし、彼らとは不思議と一緒にいて居心地が悪くなかった。聞けば、藤井らも親が離婚したとか、孤児だとか、極めて私に似ている境遇なのだった。彼らはシンナーを吸い、ケンカをし、それでも昼間は建築現場で働き、爆音を出す車を一台保有していた。中古で先輩から買ったと言う型落ちのクラウンマジスタは、初めて乗ったときには戦車のような印象であった。私は、一つだけ彼らの真似をするようになった。煙草を吸うようになった。最初は眩暈^{めまい}がし、気分が悪くなったが、やがて苦にならなくなった。私は、マルボロを吸うようになった。高校には一応通い続けた。彼らは日中は鳶の仕事で会えないからだ。学校が終わると、一人で街をふらついて、日が暮れると彼らと合流した。一人制服なのが返っておかしな気分になっていた。

彼らといくと、しばしば女性が身近に現れてくるようになった。その中の一人、美加に心を惹かれるようになった。私が生まれて初めて恋愛感情を抱いたその子は風俗嬢であった。美加は私を話の面白い奴だと認識して、普段は相変わらず自分から口をきかない私を、

ある日一対一で呼び出して、またしこたま飲ませた。その頃になると、少しは酒に免疫も出来ていたが、ウイスキーのシングルを数杯飲むと駄目だった。また酩酊した事だけは記憶にあるが、会話内容などが記憶に無い。記憶が蘇るのは、道で何度も吐いている時からだ。顎が痛んだのを覚えている。美加は優しく介抱してくれ、自分のアパートに連れて行ってくれた。姉貴と二人暮らしなんだけど、今日はいないよ、と説明する。こちらは生きた心地も無く、座布団を枕に横になった。が、美香の髪の毛の甘い匂いが鼻に入った途端、獣の咆哮で私の性欲が現出した。私は美加に襲い掛かった。美加は、驚いたものの、最初からそのつもりだったのだろう、優しくして、痛くしないでね、とだけ言った。私は、興奮のみ先立って、実際は童貞なものだから、挿入が上手くいかなくて焦った。美加は、それも織り込み済みだったのだろう、手で誘導してくれた。私は、避妊具すらつけず、あつという間に果てた。美加はそんな私を抱きしめて、髪の毛をなでてくれた。私は、その安らぎに安堵を覚え、深い眠りについたのだった。

7、絶望のトンネル

あれからの私は、いつも美加のことを考えるようになった。年齢は一才上、両親は共に病死、姉は内臓の病気で余り働く事ができない。だから私が稼ぐしかないの、誰も助けてくれないよ、と囁くように言っていた。私は、自分の無力を全身で知った。彼女に対し、何も出来ない。祖父を騙して、塾に通うからと月に3万円ほどお小遣いをもらっていたが、そんなはした金は何の役にも立たない。人生に目標が出来る時、と言うのはそういう運命もあるのだろうか。私は、良い大学に入り、立身出世しよう、などと健気にも考えた。初めて人生の羅針盤を手に入れたのだ。不遇の恋人を救う。あんな

稼業から足を洗わせてやる。藤井に言つと、お前はインテリだから出来る、と言われた。周りも笑つて、お前はダイガクに行けよな、と言つてくれた。半年、一年経ち、少しずつ私と彼らは疎遠になつていった。美加との恋愛だけが残つた。いつ会つても石鹸の匂いにする。そのたびに、私には嫉妬の感情が芽生えたが、それを口にすることはなく彼女を抱いた。私の人生で、ある意味もつとも幸せな時期であつたろう。それは、幼少より孤独と受難の人生を黙つて耐えてきた私への褒美だつたのかもしれない。だが、それは長く続かなかつた。

美加は、客であつた覚醒剤中毒患者の発作によつて襲われて死んだ。頭を何度も浴槽にぶつけられ殺された。藤井からそういう連絡を受けた時、嘘だ、と最低十回は口に出して言つた。その後も、遺体を目の前にしてもなお、嘘だ、こんな事があるはずはない、と思ひ続けた。私は、私の母を再び失つたのだ。顎^{あご}が震えてきしむ。お通夜に集まつた誰もが現実を受け止めきれなかつた。私は、突如絶叫した。殺す、クロス、美加を殺した相手を今から殺してくる、殺させるーっ！出て行こうとした私を藤井ら在必死で止めた。私は転げまわつて暴れた。そして、泣いた。いつまでも泣いた。何故、俺ばかり失うんだ。いい加減にしてくれ。床を叩いて泣き叫んだ。私は、神と運命を呪ひ続けた。

私は、また元の自分に戻つた。高校こそ通つていたが、いつも相変わらず読書にふけり、誰にも関心を寄せず、そしてトイレで煙草を吸つた。家に帰ると美加の写真を見つめていた。皮膚の柔らかさを思い出していた。潤んだ目で、私汚れてるでしょう、と泣いていた事を思い出していた。時に妙子さんに暴言を浴びせるようになった。そして、その後、誰かにそっくりだ、親父そっくりだ、と気づき、絶望的になつた。夜の底に一人うずくまっていた。完全に閉じていた。全てが。一度だけ、美加を蹴つたことがあつた。約束の時

間に遅れた上に、謝らなかつたからだ。美加はとても悲しそうな顔ををした。今なお何故そんな事をしたのかわからない。顎が震える。血のせいにはしたくない。が、少なくとも自分はそういう男だ、と知った。

高校三年生を迎えた。ただ迎えただけだった。植物のように生きていた。憂鬱を全身に纏っていた。ぬくもりと安らぎに飢えていたが、何も行動する気にはならなかつた。ある日、道端に子猫が轢かれて死んでいた。無残にお腹を潰されていた。高校の帰りだったが、制服が汚れるのも厭わずすぐに抱きかかえ、一旦家まで帰り、スコープだけでもって裏手の山へ向かつた。その間、多くの通行人に不躰に見られたり、或いは主婦に同情の目で見られたが、気にしなかつた。家につく途中までに私は泣いていた。無性にこの猫が哀れで仕方なかつた。この猫も美加も同じなのだ。全く何の咎も無く、罪なくして殺されたのだ。何者かに。猫を埋めながら、私は、その何者かを激しく憎んだ。泣きじやくりながら土を力いっぱい掘つた。このやろう、こんちくしょう、などと言いながら掘つた。埋め終わる頃に、山道のほうから一人の高齢の男性がゆつくりやつてきた。手に摘んだような花を持っていた。私に、供えさせて下さい、と言つてきた。私は頷いた。男性は、両手を合わせ、静かに南無阿弥陀仏、と言つた。その間、横で立ち尽くしていた私に、男性は立ち上がり、この猫の分まで精一杯生きましよう、と言つて去つていった。猫の分まで……。繰り返し呟いた。美加の、分まで。誰が？俺が？山の木々が吹く風を受けて軽くざわめいた。私はいつまでもそこで考え込んでいた。

8、胚胎

私は、生きる意味を模索するようになった。読書の分野を、小説

一般から、哲学、宗教、思想に切り替えて、難解と言われているような書物にも手を出した。飢えを感じていた。答えが欲しい、自分の今を救う何か欲しい、との哀れなほどの現実的希求に基づいて活字を追っていた。キリストの愛に委ねてみたり、仏陀の悟りに身を預けようとも思った。カントの道徳を指針にしようと試みたり、サルトルの認識に基づき世界をあるがままに受け入れようともしてみたり、或いは老子の如く自然体に全てを委ねようともした。だが、その全てがどうもしっくりこない。やがて、それらに違和感があるのは、机上の空論、或いは、論理自体だから駄目なのだ、と思うようになった。現実の実践の中から、自分が身を持って理解出来ないから受け入れられないのだ、と結論づけた。自分の経験など所詮はちっぽけなものだ、と自分を俯瞰^{ふかん}出来るようになった。もちろん、客観的に見ても私のこれまでの人生は不幸で悲しいものとは言える。だが、幾多の人々の経験や人生と比べると、如何にも大したことがないようにも思えるようになってきた。そう思えたとき、辛いのは自分だけではない、と思えたとき、少しだけ救われた気がした。

寂しさや悲しさを埋めるのには、何でもいから行動すればいい、と思えるようになった私は、ともかくどこでもいいから大学に入り、何かをしよう、と漠然と思い、ともかくしたくもない受験勉強をすることにした。予備校に通い、周りに釣られて勉強した。すると、難関私大に何とか入学できた。父は何も言わず、妙子さんだけは喜んだ。祖父が学費を持ってくれる事になったので、最低限度のお礼をいいに、祖父邸へ言った。しばらくぶりと言う事もあったが、祖父は私を見るなり、顔が変わったな、お前なりに修羅場をくぐったのか、と言った。年の功か、大企業の経営者だからか、人の本質を言い当てるのは大したものだと思った。かすかに顎^{あご}が痛んだ。

そして、通学可能な距離のH大学に通い始めた私は、再び本を閉

じ、演劇のサークルに入った。何故かはわからない。今までの自分に仮面をつけて別の何かになりたいたい、と言うような衝動が心理の奥にあったのかもしれない。しかし、最初から難関続きであった。大きな声を出すような事が殆ど無かった私にとって、発声練習や表情の演技など苦痛そのものであった。だが、私はムキになって必死に努力した。夜中に人気のない郊外まで自転車で走り、壁に向かって大声で、私はあなたを愛しているのです、などとやっていた。春の夜は涼しく心地よかったが、腹の底から声を出すと汗がにじんだ。このような経験は全くなかったので、私は、自分が生まれ変わったように感じた。

やがて、合コンなどにも行くようになった。最初は黙っているのだが、酒が入ると、確かに私は饒舌になるようだった。一時期以来遠ざかっていた繁華街にもまた行くようになった。だが、着飾った同期を見ても、まるで心は動かない。美加は私の中に今でも生きていたからだった。私は、一生別の女性を愛せないのではないか、と思っていた。その癖、可愛らしいと思う女の子の連絡先などは手に入れるのだった。私は、案外女性を口説くのは達者なのかもしれない、それもしや血なのか、と思うと複雑なのだが、事実、父親も女性には困らないようで、妙子さん以外にも愛人らしき影は幾つもちらついている。そんな事を思うとき、俺はそうはならない、と固く誓うのだった。

9、迷路をゆく

そんなとある日、私はそのような中で出会った一人の女性とデートに出かけた。一緒に食事をしながら、道を歩きながら、色々な話を聞き、こちらにも返した。話しながら、心の中にわだかまりが生ま

れるのを感じて仕方なかった。この子は両親の仲睦まじい円満な家庭で育ったらしい。羨望と裏返しの嫉妬感と言おうか、遂に分かり合える事はないだろう、と思い、二度と二人きりで遊ばなかった。一人、二人と同じ事が続いた。幼い頃の孤独感をまた思い出した。と言うよりも、片時も離れずにと側にあつたのだろう。しかし私は、本の世界には逃げず、演劇の世界に飛び込んでいく。

一年生の下っ端は演技そのものよりも、機材運び、小道具作りなどがメインであつて、実質裏方である。遅くまで小道具の岩などを作るのは案外楽しかった。必然的に周りの仲間とも連帯感が出来る。一緒に何かをすると分かり合える、と書いていたのは五木寛之のエッセイだったか、それは事実だな、と知った。終わった後にみんなでラーメンを食べに行ったりするのはとても楽しかった。私のような人間でも、遅まきに青春を楽しむ事ができた。決して主役にはなれないのだけれども。

しかし、なかなか、本当の意味で、求めているものは手に入らない。何が足りないのかわからないので、とりあえずアルバイトもしてみることにした。ピザの配達や、居酒屋のホールをやってみた。どちらも余り長く続かなかった。それは、内容が単純過ぎるという不満であつたり、接客が苦痛だったのが理由であつた。が、少しお金が手に入ったので、自動車の免許を取る事にした。いずれ必要だろうと思つた。しかし、どうも余り適性はないらしく、よく隣の教官に小言を言われた。一応免許は取れたものの、ドライブを趣味に、と言うことにはならなそうだった。この頃は、どうも、もがいている、と言うような記憶がある。何かをしているのだけれども、どうも向かう方向が違う、と言うような。よく日記をつけるようになった。ある日は美加を思い出して嘆いており、ある日は演劇部の発表会が成功した、と書いていた。

演劇サークルの同期に羽野という男がいた。斜に構え、いつも黒い系統の服を着て、自分以外に興味のない、と言うタイプの男だった。万事に非協力的で、余りサークル内での評判は良くない男だった。ある日、大して親しくない私に、千円貸してくれ、と言う。それぐらいなら、と貸したが一向にその後返さない。千円の事でうるさく言うのもどうかと思って放っておくと、また今度は二千円貸してくれ、と言う。お金には困っていたなかつたのでまた貸したが、これも返さないの、もう貸さない、と決めていると、どうもあちこちでそういう事をしているらしい。たまたま、他の連中がそういう愚痴をこぼしているのを聞いた。ところが、ある日羽野の友人から意外な事実を聞かされた。羽野は、父親が末期癌で、大金のかかる治療を一年も続けていて、お金がないらしい。羽野は、授業の無い時は勤めてアルバイトに励んでいるらしい。そう言えば、サークルにもたまにしか来ていなかったが、たださぼっているのだらうぐらいに思っていた。人は言わないだけで影で苦労しているものだ、と思った。ちなみに彼は父の死の後、退学していった。

もう一人、同期に田中という男がいた。斜視で、しかし明るい男で、いつも冗談を言っているような男で、私も密かに好感を持っていた。ある時、私の家で一緒に映画のDVDを見ようと言う事になり、家に呼んだ。彼が薦めるチャップリンの「独裁者」と言う映画を見た。喜劇王の演技は本当に素晴らしく、見入っていたら、最後にはトーカーになった。互いに愛し合い、憎しみあつてはいけない、人生は豊かで美しいはずのものだ、憎悪と偏見を取り除き、幸福な世界のために戦おう！とチャップリンは言った。私は不覚にも泣いた。見ると、田中もうっすら涙を滲ませていた。お前にはわかるよな、そう思っただけで今日持ってきたんだ、と田中は言った。そして、映画を見終えた後、田中は、俺は目の手術がしたいんだ、と言った。私は、こんな田中を見たことがなかった。そして、彼の普段の明るさは、この悩みの裏返しなのかも、と感じた。私は、失敗の可能性

がないのならすばいいのでは、と言った。可能性は低いけれども、失明するかもしれないんだ、と俯むついた。無責任な事も言えない、と思ったが、田中は背中を押して欲しいのでは、とも思った。私は、人生で初めて、他人の人生を、大きなレベルで動かす事になった。やるべきだ、目の事をコンプレックスに思うなら。勇気を出そう、と言った。こんな事を他人に言ったこと自体初めてだった。田中は、顔を上げて、そうだな、やるよ！と言った。後、夏季休暇になって、田中は目の手術をした。無事成功した。何人かで見舞いに行ったら、田中はまだ包帯で目を覆っていたが、微笑んで成功したよ、と笑った。私は、人生で、その時ほど嬉しかったことはなかった。自分のことではないのに、心から嬉しかった。その時、はつきりわかった。誰かが、私を使って、彼に手術をするよう背中を押させた事を。やがて彼は退院し、以前より、なお生き生きと元気だった。

それぞれの

10、それぞれに、そ

大学二年生の冬、一人で京都を旅した。底冷えする嵐山を、殉教者のようにさ迷い歩き、目に付く寺社にひたすら参拝した。調和を表す仏像、怒りを隠さない仁王、世の悲しみに寄り添うような観音像らを幾多目にし、心に刻みつけようと思った。それらを我が内なる力に変えたかった。日々生きていく中で、精神のバランスは充分保てるようになったと思う。私は、ある意味で、平凡な普通の大学生になれた。だが、それはあくまで日常の中の自分であった。心には大きな空洞があり、埋めても埋めてもそれは埋まらず、そして、そもそも何を埋めればいいのかもわからない。一人安いビジネスホテルに泊まり、缶ビールを開けて、窓からぼんやりした夜の京都を見ていた。寂しいのはここに一人だからじゃない、やはり、私は母の愛を知らぬ。受けるべき時期にそれが足りなかった、その事をど

う言っても仕方ない。人にはそれぞれ運命があることはすでに知った。私よりも、なおの事若くして死んだ母や美加の方が不幸だと言う事も知った。二人の分も生きねばならぬ、強く、強く。そこまでするのだ？自らの幸福を目指すのか？金持ちにでもなるか？しかし、祖父を見ても、ああなりたいとは全く思わない。では、何者になる？何をする？考えているうちに眠くなり、その日はベッドに入った。

あくる日も京の街を彷徨^{ひろまわ}った。やがて、銀閣寺に着いた。何気なしに歩いていると、立て札でそこが「哲学の道」だと知る。哲学者の西田幾多郎らが好んで歩いたらしい。西田の「善の研究」を必死に読んだ事を思い出した。両の道の並木が冬の寒さに震えている。人通りも少なく、考え事の邪魔もない。善とは神々の意思との調和、などと西田は結論つけていたか、神か、母と美加を殺し、猫を殺し、人々を殺し、世界中に不幸を撒き散らすくてなしめ、と私は憤慨した。何故世界をこのように作ったのか。人々が幸せにのみ暮らせるように作ってくれば誰も悲しまないのに。と、慨嘆していると、そうではありません、それは仏様の意志ではありませんよ、と急に目の前に現れた老婆が話しかけてきた。独り言が口に出ていたらしい。若干恥ずかしくなり、あなたは？と聞くと、そばの法然院の従事だと言う。見れば上品そうな身なりではあるので、仏様の意志とはなんですか、と問うた。すると、

「全ての一切衆生を救う事です。阿弥陀如来様の本願です」

と言った。そうか、法然は浄土経を基本にしていたな、と思い出した。お婆さん、わかったよ、ありがとう、とお礼を言くと、阿弥陀如来様におすがりなさい、若い人よ、と手首につけていた綺麗な白い数珠をくれた。少し考えて、受け取った。その場を去って、振り返ると、もうそのお婆さんはいなかった。一切衆生、全ての生きる人々を救う、か。仏教の場合来世になるんだよな、いや、ほとん

どの宗教がそうだな。数珠からはかすかにお香の匂いがした。

少し歩くと、若王子神社なる神社についた。そこには、同志社大学を創立した、クリスチャンの新島襄の墓があった。神社内にキリスト教徒のお墓があるのが如何にも日本らしい、と私は思った。異教徒のレッテルを貼られ、十字架上で死に、復活した愛の殉死者、イエス・キリスト。愛、か。私は新約聖書の語句を思い出していた。新しい戒め、互いに愛し合いなさい、許しなさい、与えなさい、か。私は、あの父親を許せるだろうか。母の代わりにお前らが死ねばよかったのに、と言った父を。私は、ふと、自分は母の愛だけでなく、父の愛も知らないのだ、と実感した。両親に愛されずに育ったこの私が、誰かを愛せるのか！いや、しかし、少なくとも私は美加を愛していたはずだ。だが、彼女はもう私の前から去った。二度と私の前には現れない。寒さに耐えかねて、私は座っていたベンチから立ち上がった。

ビジネスホテルへの帰り道、歩道を肩を落として歩いていると、ベビーカーを押している若い女性が前からやってきた。その母の横に3歳ぐらいの小さな女の子が歩いている。ガードレールはない。と、その子が手に持っていた人形を何かの弾みで道路の中央のほうへ飛ばしてしまった。それを拾おうとする小さな子。そこへ、後ろ側、つまり私から見れば正面へ、観光バスがかなりの速度でやってきた。危ない！私はとっさに全速力でその子の元へ走った。バスが激しくクラクションを鳴らし急ブレーキをかける。私はその子を抱き上げた。と、同時にバスはぎりぎりで止まった。子供は泣き出した。母親が何度も私にお礼を言った。バスの運転手は気をつけやがれなどと捨て台詞を残し去って行った。私は、善をなしたのだろうか？母に抱かれまだ泣いている子供の頭をなでながら、この私が命を救えたのか、と実感していた。

その夜、何度も先ほどの場面を反芻した。かなりの距離があつたはずなのに、気づけば女の子を抱き上げていた。後になればなるほど、それを自分がやったのだ、と言う感覚がなくなってくる。誰かが、自分を使つてやつてくれた、と言うべきか。ではそれは誰なのか？やはり、神と言う言葉を使わねばならぬのか？つけていたテレビが、会社の更生の特集をしている。どこかの会社の社長が、わが社の立て直しの根本は、一人ひとりが与えられた役割をきちんと果たす事です、などと言っている。ビールを飲みながら、ふと、役割という言葉が気になった。役割、私の役割？

役割を果たしなさい

突然、天啓のようにこの言葉が体中を駆け巡った。そうか、そうなのか、一人ひとりにすでに役割は与えられているのか！私は、この発見に興奮した。ずっと深い霧の中にあつて、見えそうで見えないものが、今はつきり見えた。ならば、もう迷う事はない。今日も、私は私の役割を果たし、一人の少女を救ったのだ。これが私の役割に違いない。左手に巻いた数珠も何かの導きなのだろう。何も救世主になるんじゃない。普通に生きればいいんだ。でも、その時その時において、果たすべき事は現れてくるに違いない。これから出会う人たちと、互いに幸福になれるように、そう生きればいい。私は、この時、父をも許せた。父がああいう人でなければ、私はこう思えなかつただろうから。私は、すぐに日記帳を取り出した。私は、今こそ真に生まれたのだ、と。頃は二度と痛まなくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4240g/>

頤（おとがい）

2010年11月28日16時07分発行